

#### 四 昭和初期の釜ヶ崎は 貧困と疫病に支配された町だった

郡昇作氏の『日本の玄関・釜ヶ崎』によると「大正末期から昭和初期にかけて、地下鉄動物園前近くの霞町から南へ今池あたりまでは、阪堺線の東側が水溜りで塵捨場になっていて、犬や猫の死体が捨ててあり西側はネギ畑であった」ということである。

現在でこそこのあたりは外観だけでも立派なマンモスドヤや、駐車場、金魚屋などがあって、釜ヶ崎ではいちばん整理された地域になっているが、当時は昼でも陽光のささない陰惨な木賃宿が軒を連ねていたという。また、木賃宿の大便所は庭の片隅にあり、小便所というと肥桶が一つだけ置いてあった。しかし、この肥桶を利用する人はまれで、ほとんどが路地などに放尿していた。共同炊事場は風呂場の横にあるのが普通であったが、止宿者たちは通路の土間や二畳ぐらい

の狭い部屋でカンテキ（七輪）に火を起こして炊事をしていた。通路といっても通風、採光はほとんどなく、手を出すと隣の部屋に届くほどの狭さであったとスケッチされている。

さて、昭和初期のわが国は昭和二年（一九二七年）の金融恐慌に端を発して、風雲急を告げる状態となり、企業は倒産して失業者はちまたに満ち、農村は疲弊して東北地方では娘を売るということが日常茶飯事となりはじめた。この慢性的な不況に陥ったことで、釜ヶ崎へ転落してくる失業者は日に日にふえていく。そして、郡昇作氏の著書『釜ヶ崎無宿』によると、昭和四年から昭和九年までの間に、釜ヶ崎へ流入してきた人の数は次のとおりである。

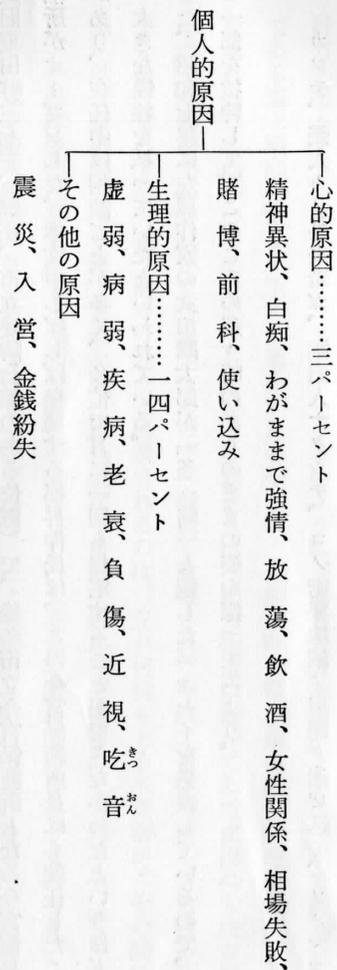
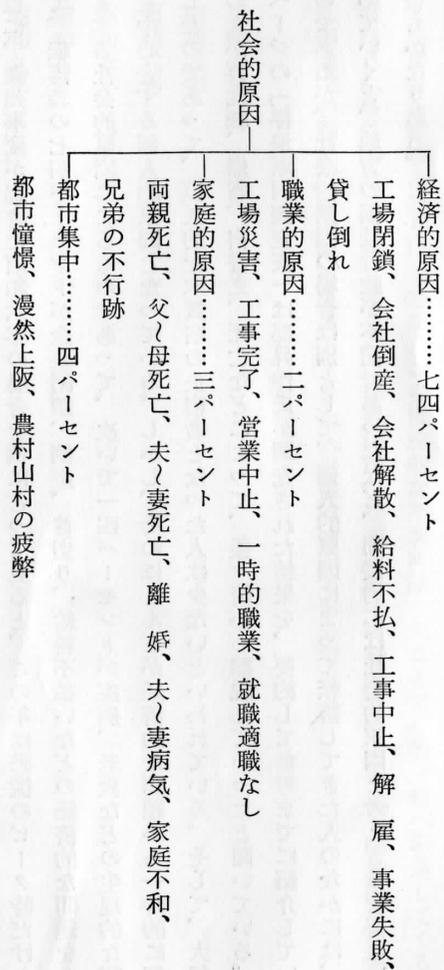
昭和四年	五五一三名
昭和五年	九二五〇名
昭和六年	九八五六名
昭和七年	一万三六七五名
昭和八年	七五六七名
昭和九年	六九二八名

仮に、満州事変が起きた昭和六年の場合を例にとってみると、この年は恐慌のピーク時だけあって、転落者の七四パーセントが企業閉鎖、倒産、首切り、給料不払いなどの経済的な問題を中心とする社会的理由によるものであって、次いで一四パーセントが疾病、老衰などの生理的な問題を中心とする個人的理由となっている。しかし、そのほとんどが経済的な問題から一時的に転落したのであって、恒久的な木賃宿の止宿者となった人は少ないといわれている。そして、大部分の人が再就職、帰省、宿替え、死亡などによって、釜ヶ崎から離脱していったと聞いている。次ページの「浮浪原因調査表」は郡昇作氏が調査された結果を、要約して参考までに紹介しているのであるが、社会的理由の場合は別として、個人的理由によって転落してきた人のなかには、詰めていくと、地方の福祉行政が不備であったなど、間接的には社会的理由と考えざるを得ない場合もかなりある。

社会的理由で転落してきた人のなかでも、経済的な問題による場合の人数は、景気の動向によって大きく伸縮するが、生理的な問題を中心とする個人的理由による場合の人数は、全体としてのなかでの比率に変化があっても、人数的にはほぼ一定している。今日、釜ヶ崎では一日、一〇〇〇人単位で流動しているといわれているが、疾病などの理由で入ってくる人は明白ではないが、全体のほぼ二〇パーセントといわれている。これはわが国の福祉行政の欠陥によるのであって、

特に福岡、鹿児島など九州方面からの流入が多いのは、その裏面に経済的な貧困があることを見抜かざるを得ないのである。

浮浪原因調査表（昭和六年の場合）



ところが、もう一つおもしろい一面があることも同時に、見い出すのである。というのは、社会福祉がゆきとどいている北欧では、意外と老人で自殺する人が多いといわれ、世界の七不思議の一つのようにならされているが、逆に行政不在とさえいわれている釜ヶ崎で自殺したというような話はあまり耳にしたことがない。これこそ釜ヶ崎の七不思議の一つといわれるべきであり、これから社会福祉活動としんげんに取り組もうとしている人たちにとって、この不思議な現象は何かのヒントを与えるのではないかと思われる。

さて、昭和初期の釜ヶ崎は、いまマンモスビルの愛隣総合センターが立っている萩之茶屋一丁目（旧西入船町）に、桑田写真台紙工場、石川石けん工場、小川石けん工場があり、現在、市立今宮中学校となっている花園町北一丁目（旧東四条）には日本防水布工場があったが、別に工場地帯ではなくどちらかというところ、木賃宿を中心にしたドヤ街であった。また、このころの木賃宿には売春婦や男娼を置いて、二重に稼いでいたところもあったという。

昭和七年（一九三二年）一月、不況でますます増大する無宿民を保護しようとして、太子二丁目（旧東田町三七三、現在、市立愛隣会館のある位置）で、後に市立今宮保護所となる今宮簡易宿泊所がオープンした。本文中しばしば登場する郡昇作氏は、この今宮保護所長にも就任したことがあり、在任中は相談ごとが多く、多忙で月に一回も帰宅することができなかったというほどの、大きな犠牲を払っていたといわれている。

また、昭和七年に左翼作家の武田麟太郎が「釜ヶ崎」と題したエッセイを発表しているので、その一部を抜粋して、このころの釜ヶ崎のありのままの姿を探ってみよう。

カッテ、幾人カノ外来者ガ、案内人ナクシテ、コノ密集地域ノ奥深く迷ヒ込ミ、ソノママ

行方不明トナリシ事ノアリシヲ聞ク——このように、ある大阪地域に下手な文章で結論されてゐる釜ヶ崎は「ガード下」の通称があるやうに、恵美須町市電車庫の南、関西線のガードを起点としてゐるのであるが、さすがその表通りは、紀州街道に沿つてゐて皮肉にも住吉堺あたりの物持ちが自転車で行き来するので、幅広く整理され、今はアスファルトさえ敷かれている。それでも矢張り他の町通りと区別されるのは、五十何軒もある木賃宿が、その間に煮込屋、安酒場、めし屋、古道具屋、紹介屋などを織り込んで、陰鬱に立ち列んでいるのと、一帯は強烈な臭気が——人間の臓物が腐敗して行く臭気が流れていることであろう。ここで、武田麟太郎がスケッチしているのは、通称、釜ヶ崎銀座といわれている旧住吉街道あたりの風景であるが、そこもやはりドヤ街であり、次の箇所では一歩、奥に入って、薄い雨戸を真ん中に立てて、簡単に区切っている三畳の売春宿について記している。

ちやうどその時、その中から口争いをはじめた男と女の声が聞えて来たのである。

——女の声がのしるには「そんなあほらしいことできるかいなア、十銭淫売のところでも云ふとくなはれ、うちはおちがふ！」と云ひ、見そなつては困る、あはたんめと、附け加へるのであった。——小説家は、その言葉に氣をとられながら、それでは隣りにいる女も五十銭の口なのであらう、だから、十銭のものよりも格式を以て客に望んでいと云ふわ

けであらうと考へ、妙なところに——人はどん底まで来ても、まだこれより卑しい下のものが存在するのだと自分を慰めて高い心を失はないでいることに感心していた。

このスケッチから察すると、彼女は自分が十銭という最低の売春婦でないということで、己れを慰めていることがわかる。さらに、彼女は貧しいがゆえに他を蔑視していることも教わるのである。そして、貧困のゆえに生まれた蔑視の思想は、蔑視している本人をも含めて多くの隣人を傷つけ、貧しくし、引いてはどん底の状態をつくり出していくことも学ぶのである。

ところで、武田麟太郎のエッセイをもう少し続けて紹介していくと、この売春婦が実は男娼であつたことに気付いて、次のように記している。

「あんたは、女とちがふな」と云つたのである。それを相手は随分と意地悪くきいたのかも知れなかつた。——どうして、そんなこと云い出したのだろうと、暫くの間、女は彼の顔を見つめていた。それから、両手を揉むやうにして、下にうつむいて、嘆息した。

「やっばり——分りまつか」と云つて黙り込み、それでも勇気を取り戻したのか「そやけど、今までに一べんも見現はされたことはおまへなんだ、ほんまだっせ——兄さんにかかっ

てはじめて——わやくやな」と、てれ臭そうに力を入れて云つた。

思つた通り男だつたのかと、小説家はうなづいたが、何とも分らぬ変な気持ちになつて——

「はう、そいで」と云ひ出すと、相手はその顔色を読んで、すぐ答へた。

「ええ、ちゃんと、そいで商売しますねん、をなごとしてな」と。

武田麟太郎が会つたと思われる二〇歳前後の男娼は、おそらく貧しいがゆえに女性に変身したのであろう。当時の男娼のなかには、だんなにかわいがられていたがつい浮気をしたことが露見し、釜ヶ崎に転落してきたという例もあつたという。また、軍隊などにいたころ、上官や仲間から教えられた経験をもとに、男娼になつた者もあつたと聞いている。しかし、その根本的原因は貧困にあり、釜ヶ崎で昔も今も最もじめでさげすまれた仕事をしているのが男娼であらう。

昭和八年（一九三三年）十月五日、大阪にはじめて地下鉄が開通し、動物園前に新たにステーションが設けられた。そして、釜ヶ崎はさらに交通至便な地域となつた。この年、今宮警察署（現在、西成警察署）裏の現在、海道公園となつているところに「聖心セツルメント」と名付けられた施設が開設された。このセツルメントは当時、フランスからきたカトリックの修道院「愛徳姉

#### 4 昭和初期の釜ヶ崎は貧困と疫病に支配された町だった

妹会」のテルミエ修道女、カタン修道女、コセフ修道女、ヨゼフィン修道女によって、医療・保育事業を行なうために創設されたものである。このころの釜ヶ崎については、愛徳姉妹会が出版している著書『花咲く島へ』が、次のように記している。ただし、この著書はすでに故人となつたテルミエ修道女が、パリに送つた手紙を後に日本語に翻訳して編集されたものである。

「今宮、今池という所は屑屋、生活困窮者の巢窟です。テルミエ修道女にとってはここはパリを取り囲む地帯のような所に思われるのですが、ただ違う点は散らばっている数え切れない子供がいること、また失業者の数も無数であることです」。

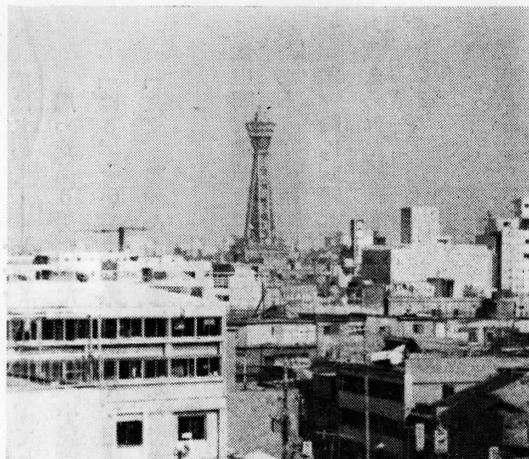
もちろん、パリではノートルダム寺院の近くに釜ヶ崎のようなスラム街があったそうだが、上流階級出身のテルミエ修道女にとって、ここの生活は全く大きな驚きであつたに違いない。

さらに、釜ヶ崎にあつた慈善病院を見学して、次のようにその感想をもらしている。

「先日、私は貧困者のための病院を見舞いました。これは地獄の幻想ともいふべきでしょう。広間の中にごちゃごちゃに投げ入れられた人々、そこでは老衰や病弱の人、傷だらけのものが、世話も手当もろく死ぬに任かされています」。

この臭気に満ちた監獄のような病院にいる人たちの中にはやさしそうな内気な娘さんの顔も見

釜ヶ崎から望んだ通天閣



昭和八年、フランスからきたカタン修道女

え、じっと私たちを凝視しています。いっしょに連れて帰りたいような思いに打たれました」。

修道女たちが働いていた聖心セツルメントは、太平洋戦争で爆撃によって焼けてしまったが、彼女たちはあの戦争中の弾圧のなかにあっても、母国フランスに帰ることなく、憲兵や警官のきびしい監視のもとに、釜ヶ崎が丸焼けになる少し前までここにとどまって奉仕していたといわれている。また、『花咲く島へ』からの引用文にあるテルミエ修道女は、終戦後あの混乱のなかにあつた天王寺駅で浮浪者たちのために奉仕していたが、同じ修道院で働く二、三の修道女とともに発疹チフスに感染して、ついに言葉も十分に通じない異国でその生涯を終えている。このフランスからきた青い目の修道女のうち、カタン修道女だけが生き残って昭和四十五年（一九七〇年）十月から再度、釜ヶ崎に入つて三角公園前の社会福祉法人・邦寿会診療所で奉仕していた。しかし、年も寄つたので現在、宝塚市小林にある愛徳姉妹会の保育所「ばらホーム」で余生を送っている。

時を同じくして、今宮警察署前の旧住吉街道に面した海道町九番地（現在、萩之茶屋二丁目）で、キリスト教の一派である救世軍愛隣小隊が駐屯していた。この愛隣小隊も釜ヶ崎が太平洋戦争で丸焼けになるまでこの地で伝道を続けていたのである。昭和三十六年（一九六一年）以降、

釜ヶ崎が「あいりん地区」と呼称されるようになったのは、釜ヶ崎にあつた愛隣小隊の「愛隣」という名称を、後に行政当局のだけれが、思い出して名付けたということも考えられる。いづれにしても、釜ヶ崎での社会福祉事業、とりわけ飛田遊廓で働いていた女性の更生に関しては、釜ヶ崎伝道七〇年、愛隣の精神に生きた救世軍の働きを抜きにしては語れないのである。

わが国が国際連盟を脱退して、大陸への領土野心を露骨に示し、満州で起きた戦火がいよいよ熱河におよびはじめた昭和九年（一九三四年）九月二十一日、室戸台風が関西地方を襲い、釜ヶ崎の住民になじみの深かつた四天王寺の五重の塔を、アツという間に倒壊させたのである。このとき狂風は南大阪一帯の大樹を次から次へとなぎ倒し、釜ヶ崎の粗雑な木賃宿もずいぶんと大きな被害を受けた。このころから二、三年間の釜ヶ崎が、戦前を通して最も肥大、膨張していった時期である。同時に、住民にとってきわめてきびしいどん底生活を強いられていた時期でもあつた。それはこの間に国家が国民に対して体制責任を果たさそうとせず、ひたすら目を中国大陸に向け、軍備拡張、大陸進攻のみに奔走していたからである。

それを実証するものがブロック内に点在する簡易宿数と、ブロック内全体の人口の推移である。行政当局のデータによると、昭和十年（一九三五年）、釜ヶ崎にあつた簡易宿数は五九軒を数え

4 昭和初期の釜ヶ崎は貧困と疫病に支配された町だった

釜ヶ崎人口の推移

昭和12年	13,984人
昭和13年	14,184人
昭和14年	10,171人

釜ヶ崎での人口調査

一戸住まい	8,250人	54%
宿住まい	5,734人	41%
不明	(約200人)	5%

昭和13年調べ

釜ヶ崎における男女比

男性	8,239人
女性	5,645人
計	13,984人

昭和12年調べ

年（一九三五年）に釜ヶ崎にあった五九軒の簡易宿のうち、三二軒が密淫売の置屋で、そこには八〇人近い売春婦がいた。さらに九軒が男娼の置屋で、そこを根城に働く男娼は約一三〇人を数え、今日でも同様だがこれらの人たちは夕

昭和初期の簡易宿の構造は現在と同様、止宿者の自由な出入りを防ぐために、玄関から入ると袋小路のようになっていて、それぞれの部屋は平均三畳で、大部屋もあったが一方口で窓がなく、じめじめとしていてまるで洞窟のようであった。三畳の部屋は一世帯四、五人が折り重なるようになって寝ているのが普通で、そこにはふとんと鍋釜と七輪が置いてあり、薄暗くて通風採光は全くなかった。大部屋には何人かが素泊りするのであるが、それぞれの人のプライバシーが守られていないのはもちろん、深夜になって薄い裸電球を消すと床の下あたりで、南京虫群が音を立

釜ヶ崎における木賃宿数の推移

大正5年	44軒
大正6年	50軒
昭和10年	59軒
昭和13年	64軒

あいりん地区における簡易宿数の推移

昭和42年	258軒
昭和47年	269軒

宿数が昭和十三年に六四軒にもなったことは、国家や自治体が当然、宿舎を与えて保護すべき人たちを、そのまま放置していたからであり、今日でも放置しておくやり方は少しも変わっていないので、二七〇軒近くまでにふえたということができよう（大正十五年十二月末、行政当局は「木賃宿」を「簡易宿」と呼称することに変更している）。

だが、昭和十三年（一九三八年）には六四軒にふえている。人口は昭和七年（一九三二年）に簡易宿の止宿者だけでなく、一家を構えた商人なども含めて約一万二〇〇〇人であったのが、昭和十二年（一九三七年）には約一万三九八四人、昭和十三年（一九三八年）には約一万四一八四人へと微増している。ただし、この数字は旧今宮スラムともいわれる、いわゆる釜ヶ崎地域だけを対象として調査されたものである。従って、現在はあいりん地区に指定されているが、必ずしも釜ヶ崎とはいわない地域にあった簡易宿数、また、そこに居住していた人口は加算されていない。すなわち、山王町や太子一―二丁目（旧東田町）付近にあった簡易宿数や人口が加えられていたとすると、行政当局が発表している数字の二倍近くは、優にあったと考えられる。しかし、簡易

方になると街頭に立って客引きしていたといわれている。たしかに、二、三軒の簡易宿は置屋そのものであったと聞いているが、他はそういったたぐいの人たちが止宿してただけで、置屋と決めつけると語弊のある状態ではなかったろうかと思われる。

〔釜ヶ崎にあった簡易宿名〕

八百安、第一・第二・第三八百安、鶴屋、第一・第二鶴屋、朝日屋、第二朝日屋、日吉屋、第二日吉屋、大和屋、あづまや、吉野屋、松鶴屋、三河屋、富士屋、第二富士屋、恵美須屋、春木屋、広島屋、末広屋、小松屋、常盤屋、大黒屋、日乃出屋、八幡屋、恵美鶴屋、伊丹屋、山田荘園、鹿児島屋、福田屋本店、土屋、栄楽屋、紀州屋、玉屋など

（郡昇著作『日本の玄関・釜ヶ崎』より）

人口は昭和十三年（一九三八年）の一万四一八四人をピークとして、昭和十四年（一九三九年）には一万一七一人となり、一挙に四〇〇〇人も減っている。これを境に以後、終戦後まで年ごとに漸減している。これは昭和十二年（一九三七年）七月七日、蘆溝橋事件に端を発した日中戦争は、たちまち中国全土にわたって拡大しはじめたため、これまでに勝手に廃棄し、振り向きもしな

かった釜ヶ崎の住民まで動員をかけたので、このような結果が出たと見てよからう。事実、昭和十三年（一九三八年）七月一日、国家総動員令が下ったという時勢を鑑み、当時、東入船町（現在、萩之茶屋一丁目）にあった市立日雇労働紹介所を国家機関に移管している。

また、大戦がはじまる昭和十年ごろの木賃宿の止宿者には、次のような職業が多く見られた。

〔行商〕

生魚、乾物、八百物、玉子焼などの行商。マッチ、石けん、針、たわしなどの行商。紙芝居、樽買い、灰買い、バター屋、毛買い、鋸目立て、靴修繕、砥屋、順礼、屑拾い、大道芸人、傘修繕、下駄直し、チンドン屋。

〔労働〕

手伝い、沖仲仕、人夫、立ん坊、衛生人夫、土方、井戸掘り。

〔職人〕

玩具工、鉄加工、サドル工、洋裁工、製本工、木箱職、ペンキ職、塗装職、指物師、家大工、鳶職、板場、理髪職。

これらの職業は改めて分析するまでもなく、ほとんどが雨天の日には就労困難な職種、重労働のため連日、就労することが困難な仕事で占められている。そして、雨の三日も続くか、うっかり病気にでもかかったりすると、たちまち宿賃が払えなくなり、釜ヶ崎で通称「アオカン」といっている野宿をはじめ、心身ともに再起不可能なルンペン氏に変身してしまうことがある。しかし、この身分保障のない不安定な職業に従事していた人たちも、国家総動員令によって強引に軍事産業に組み入れられ、老人、病人、婦女子を除いてかろうじて細民職から離脱することになる。教育問題については昭和十三年（一九三八年）一月十九日、これまで浪速区の広田神社西側にあった、長町四丁の貧しい住民の子弟を対象とした市立徳風勤労小学校を、釜ヶ崎の中心部にある甲岸町一番地（現在、萩之茶屋二丁目）、いま今宮市民館のあるところへ移建させている。これは、明治四十四年（一九一一年）七月、久保田権四郎氏という篤志家によって設立されたもので、最初は「徳風尋常小学校」と名づけられていた。しかし、長町住民の釜ヶ崎への移動がほぼ完了したので移したのであり、後にこの徳風勤労小学校が持っていた児童福祉的な役割は、昭和三十六年（一九六一年）八月一日の騒動によって開園された「あいりん学園」に継承されることになる。また、このころ、徳風勤労小学校に通学する父兄の宗教調査をしたところ、次の宗派の順となっている。

「真宗百五十一、真言宗十七、浄土宗二十五、天台宗二、禅宗十三、日蓮宗七、天理教三、キリスト教一、神道六、黒住一、大念仏宗一、無宗十八、計二百四十五」

この数字から見ても、当時、徳風勤労小学校の生徒数は三〇〇人近くいたのではないかと思われる。それにしても、貧困の結果、中途退学するものが跡を絶たなかったといわれている。

さらに、徳風勤労小学校が釜ヶ崎に移建された昭和十三年、行政当局が調査したと思われるデータによると、ブロック内にある飲食店は食堂三四軒、酒屋九三軒、屋台六〇軒、の計一八七軒があり、娯楽店は玉突き二軒、麻雀七軒の計九軒があったとしている。病気で多かったのは梅毒、胃腸病、栄養不良、結核、脚気、トラコーマなどで、チフス、ジフテリアといった伝染病が発生すると、すぐ蔓延したといっている。これは住環境が劣悪であるとともに、医療体制の不備、栄養失調にも原因するところが多かったと見ることができる。

このころ、釜ヶ崎に住んでいたあるインテリに、当時の町の様子を尋ねると、  
 「一戸住まいといっても撮影所に立っている家みために軒が低く、ほとんどが畳など敷かないで土間で暮らしていました。また、表通りはそれほどありませんでしたが、裏通りのきたないこと、くさいことといったらそれは大変なものでした。環境がこのように悪いこともあってか、テンカンで倒れているのをよく見たことがあります。」

4 昭和初期の釜ヶ崎は貧困と疫病に支配された町だった

釜ヶ崎における年齢別居住者数

3歳以下	684人
5 "	439人
8 "	615人
10 "	456人
15 "	888人
20 "	898人
25 "	1,014人
30 "	1,080人
40 "	1,580人
50 "	1,192人
60 "	776人
61歳以上	549人
計	10,171人

昭和14年調べ

のマンモスドヤの一部はブ  
ロック外に居住する資本案  
によって経営されており、  
このこと一つを見ても人間  
関係は全くないといえるし  
釜ヶ崎の日雇労働者がいか  
に利益を得るための対象と

また、女がもっと大勢住んでいたように思います。この人たちはもちろん主婦がほとんどであったし、そのころはどんな貧しい家庭でも女は働いていませんでした。今日と違って、女は働かないというのが当時の常識だったんでしょね。

また、下駄の片方でも、いま自分が着ているシャツでも洗って、乾きもしないうちに売ることぐらい、平気で行なわれていました。それに瀬戸物のかけら以外ならなんでも売られていたように思います。

住民は警官や官吏に対してはわりと従順で、騒ぎなど皆目ありませんでした」

と、懐古しながら話してくれた。

戦前の釜ヶ崎には男子六割、女子四割の比でわりと世帯持ちが多く住み、流動性はあったが今日ほどではなく、意外と定着していたといわれている。また、身分保障のない日雇いの職業が圧倒的に多かったが、平均月収は約三〇〇円近くあり、かろうじて一家が食いつないでいた。しかし、家賃、宿賃に月平均一〇〇円以上も支払っていたというから、収入に対してかなり高負担であったことがわかる。そして、この数字を見ている限り、戦前の簡易宿は今日の簡易宿より暴利をむさぼっていたということが出来る。また、今日起きているような騒動が見られなかったのは、卑屈な棄民意識が住民を支配していたことに加えて、家庭を持っている人が多く、その上、労働

者意識が芽生えやすい日雇労働者の数が、今日ほど多くはなかったことにもよると考えられる。

さらに、木賃宿の亭主は昔から「われわれは貧しい人に安い宿を提供しているのだから、ある意味で社会事業をやっているのだ」とよくいう。たしかに、国家なり地方自治体が当然、保護すべき人たちの野ざらしにしておくから、たばこ銭に毛の生えたぐらいのお金で宿泊できる木賃宿が誕生したのであり、そういった意味で木賃宿の亭主のいい分は正しいといわざるを得ない。余談になるが、ある識者の意見によると、東京・山谷の簡易宿の場合は、昔から労働者に信頼が厚く、銀行代わりに亭主に金を預けている人たちはいくらでもあるといわれている。釜ヶ崎におけるドヤの人間関係においても、こういったレベルまで高められることが望ましい。しかし、今日

して、捉えられているかを知ることのできるものである。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、わが国は、アメリカ、イギリスなどの連合国に対して宣戦を布告し、第二次世界大戦は本格的に火ぶたを切った。戦火は次第に拡大し一年後には南太平洋方面にまでおよんだが、昭和十八年（一九四三年）二月一日を期して、武運つたなくガダルカナル島より撤退せざるを得なくなり、以後、日本の陸海軍は全線にわたって後退を開始することになる。

『西成区史』に記されているところによると、この年の四月一日、大阪市では行政区の改革を行なうため、従来の一五区制から二二区制に変更し、人口増加の著しかった住吉区の一部を、西成区に編入している。この改革により、住吉区に属していた山王町一―三丁目（旧山王町一―四丁目）が西成区に組み入れられ、西成区は粉浜東之町、中之町、西之町の一部と津守町の一部が住吉区に移されている。そして、山王町三丁目（旧山王町四丁目）にあたる飛田遊廓は、このときをもって西成区となっている。今日でも旧飛田遊廓地域はいりん地区となっているが、あえて「釜ヶ崎」と呼ばれないのはこのような理由にもよるといってよい。

戦時下の釜ヶ崎はその豊富な人的資源が狙われて、昭和十七年（一九四二年）五月に空襲にも心配のない地下鉄が花園町―花園町間に開通し、さらに交通至便なところとなった。続いて、昭

和十八年（一九四三年）五月に、後にあいりん地区と深いかかわりを持つことになる西成保健所が、西成区辰巳町二丁目に開設している。この年の終わりごろから戦争の雲行きがあやしくなったので、西成一帯では防空壕生活の準備もはじまった。

サイパン島でも、硫黄島でも日本軍が全滅し、いよいよ本土決戦の準備が進められていた昭和二十年（一九四五年）三月十三―十四日、大阪大空襲があり、旧今宮スラムといわれていた釜ヶ崎のドヤ街は、わずか一日足らずで丸焼けになった。西成警察署も、今宮市民館もこのときに焼失している。焼けた地域を現在の町名でいうと太子一―二丁目（旧東田町）、天下茶屋北一丁目（旧今池町の商業・居住ブロック）、それに萩之茶屋一丁目（旧東入船町、西入船町）、萩之茶屋二丁目（旧海道町、甲岸町）、萩之茶屋三丁目（旧海道町の一部）、花園北一丁目（旧東四条）の商業ブロックである。焼けずに残ったのは山王町一―三丁目（旧山王町一―四丁目）、天下茶屋北二丁目（旧曳船町）の商業・居住ブロックであり、大阪市中心部で焼け出された人はここに知人を頼って殺到したといわれている。いずれにしても、この大空襲によって半世紀にわたって培われてきたスラム・釜ヶ崎は灰となって、戦前は終わり、人口は急速に減少したのである。

さて、釜ヶ崎の戦前を顧みるとき、ここに転落してきた人は本人の心構え、平素の行ないが悪

かったからとして、その理由を放蕩、疾病、精神病、前科があるなど個人的原因が主たるものととらえている人が多かった。それに伴って宗教家や教育者も、住民の回心や反省をせまるといふカタチの精神派の人たちが、ほとんどではなかったかと思われる。事実、キリスト教関係を見ても太鼓やラッパを鳴らして伝道する救世軍、フリー・メソジストというファンダメンタリスト（純福音派）たちが活躍していたし、長町住民の子弟を対象として誕生した徳風勤労小学校の二代目校長小森俊一氏は教育者として信頼されていただけでなく、二宮尊徳を師と仰ぐ報徳論の実践者であったともいわれている。

しかし、恐慌がピークに達した昭和六年の翌年、すなわち昭和七年、釜ヶ崎に転落してきた人口は最高の一万三六七五人を数えており、うち七四パーセントが企業倒産、首切り、事業失敗など経済的な問題を中心とする社会的要因であった。このことは個人の回心、反省をせまり、道徳的な生活を奨励するだけでは、場合によっては問題の本質にふれることをそらし、少しも根本的な解決に近づかないことを示唆していたと見てよい。だが、当時ひたすら軍国主義への道を突きすすんでいたわが国で、特に釜ヶ崎のような問題で社会的、政治的立場から、積極的に追求し、発言していくことは、どれほど危険な行為であったかは、改めていうまでもない。そして、このような都市の病気を治療するためには、個の問題だけでなく、社会全体とのバランスのとれた政

策が不可欠であると認識されはじめたのは、戦後もずっと後になってからのことである。

さらに、行政当局の釜ヶ崎対策で注目すべきことは、昭和初期の恐慌時にあまりにも釜ヶ崎に人口が集中したため、その分散を計画し、候補地に大正区の埋め立て地を選んだことがある。しかし、そこは釜ヶ崎とその周辺のように交通網、道路網がそれほど整備されておらず、就労情報も少ないうえ、作業現場へ即刻、赴くことがきわめて困難となるため、住民は移住しようとしなかったのである。また、埋め立て地の周辺には飛田や新世界のような歓楽街がなく、遊技場や麻雀屋などの慰安施設もなかったため、通天閣がよく見えるこの町にとどまる人が多かったのである。この分散計画はこうして結局失敗に終わったのだった。

行政当局ではもはや分散は困難と見ると、改革していく以外に方法がないと思ったのか、また、少しでも住民のメンタル・ヘルスを回復していこうと考えたのか、その後、新しく緑化プランをたてて、歩道に柳を植樹しはじめたと聞いている。だが、せっかく植樹された柳も、多くはうざ晴らしのために折られてしまっ、やがて枯れてしまったといわれている。